1-1 教師海外研修の主旨

2002年4月から「総合的な学習の時間」が本格導入されました。JICAは、開発途上国における技術協力（ボランティア事業を含む。）や資金協力で培った経験、人材またはネットワークを有しており、開発教育支援の一環として、教育現場に積極的に協力していきたいと考えています。

本研修は、国際協力に関心があり、授業やクラブ活動などで開発教育や国際理解教育を実践している小学校・中学校・高等学校・特別支援学校の教員及び指導主事を対象に、開発途上国で国際協力の現場や現地の生活実態を視察し、今後の授業に役立ててもらうことを目的とした研修プログラムです。

兵庫県からの研修参加実績

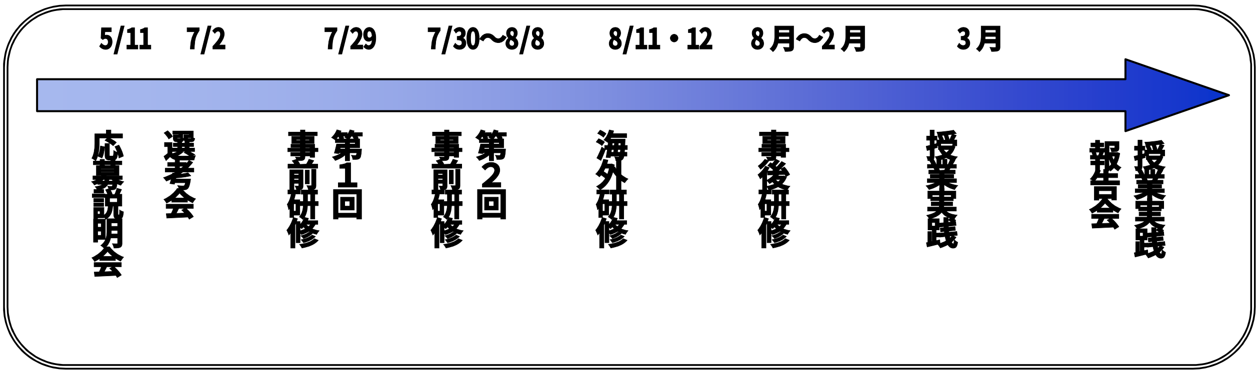
派遣年度	小学校※	中学校	高校	教育委員会事務局
1996	ー	ー	タンザニア（2）	
1997	ー	ジンバブエ（1）	ベトナム（2）	
1998	ー	バングラデシュ（2）	メキシコ（2）	
1999	ー	ー	ー	
2000	ー	モンゴル（2）	ケニア（1）	
2001	ー	ラオス（2）	ヨルダン（2）	
2002	ー	ドミニカ共和国（2）	ー	
2003	ベトナム（2）	ラオス（2）	ケニア（2）	
2004	フィリピン（2）	ラオス（2）	フィリピン（2）	
2005	タイ（2）	タイ（2）	タイ（1）	タイ（1）
2006	スリランカ（2）	スリランカ（1）	スリランカ（3）	スリランカ（2）
2007	インドネシア（4）	インドネシア（1）	インドネシア（2）	インドネシア（1）
2008	インドネシア（3）	インドネシア（3）	インドネシア（1）	

※小学校については2002年度から開始（2002年度は兵庫県からの参加者なし。）

1-2 教師海外研修の目的

（1）JICA事業の視察やJICAボランティア（青年海外協力隊・シニア海外ボランティア）及び専門家との意見交換を行い、政府開発援助（ODA）による国際協力事業に対する理解を深める。
（2）市民団体などが実施する活動を視察し、ODAとは異なる国際協力事業に対する理解を深める。
（3）現地の学校視察及び教員と意見交換を実施し、インドネシアの教育事情を理解する。
（4）ホームステイやホームビジットを通じて、現地の人々と交流を行なうとともに、インドネシアの生活・文化・社会事情を理解する。
（5）帰国後の授業実践に活用できる教材や物品を収集する。
（6）一連の研修を通じて感じたことや体験したことを基に、授業実践計画を作成し、各所属校で開発教育・国際理解教育の授業を実践する。
（7）本研修終了後も、開発教育・国際理解教育を継続して実施し、各所属校及び地域の教員に対して開発教育の普及を推進する。

1-3 教師海外研修の流れ



研修日程詳細

第1回事前研修：2008年7月2日（水）　（場所：JICA兵庫）

目　的　：① 参加者間の親睦を図り、現地での視察のポイントや注意点を確認することで、海外研修をより実り多いものとする。
② 帰国後の授業実践に向けて、開発教育・国際理解教育の概念や具体的な手法について学ぶ。

研修項目：① JICA事業概要説明・教師海外研修事業概要説明
② 研修国事情（インドネシアの歴史や文化について）
③ 安全対策ブリーフィング
④ 過去の参加者による本研修報告及び授業実践
⑤ 開発教育教材の紹介（「レヌカの学び」）

第2回事前研修：2008年7月29日（火）　（場所：JICA兵庫）

目　的　:① 帰国後の授業実践をより実りあるものにするために、海外研修における目的の再確認をする。
② 海外研修において、渡航上の注意点などの最終確認及び現地での視察のポイントや注意点を再確認する。

研修項目：① 海外研修について（出発まで、帰国後の流れ、現地での活動目標設定）
② 渡航上の注意（安全、健康、非常時の対策）
③ ワークショップ「より実りある帰国後の授業実践にむけて」

事後研修（第5回多文化共生のための国際理解教育・開発教育セミナー）：
2008年8月11日（月）、12日（火）　JICA兵庫にて実施

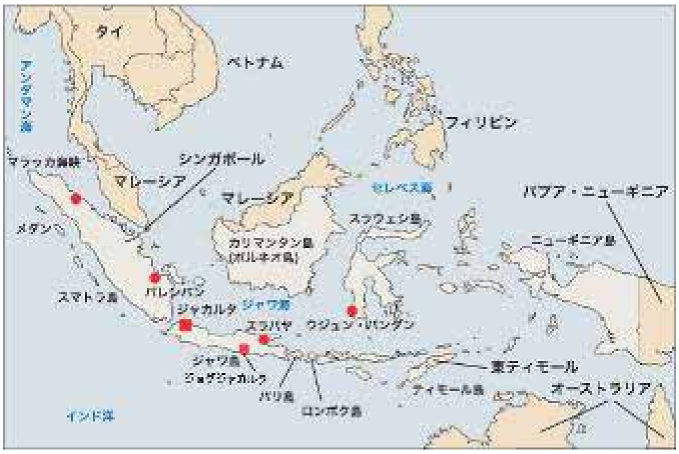
目　的　：　経験豊富な講師陣から、教室ですぐに使える開発教育教材（参加型ワークショップ）の手法を学び、海外研修の成果を活かした指導案作成の一助とすることを目的に、一般公開の本セミナーに事後研修として参加した。（一般参加者100人とともに、本研修参加者も参加した。）

研修項目：　「参考資料３」参照

1-4 2008年度JICA兵庫実施の海外研修について

(1) 派遣国概要

国　名　：インドネシア共和国
　　　　　(Republic of Indonesia)
首　都　：ジャカルタ
面　積　：189万km²（日本の約5倍）
人　口　：2億2,800万人（日本の約2倍）
民　族　：ジャワ族・スンダ族など
公用語：インドネシア語、その他地域言語
宗　教　：イスラム教（約90%）ほか
独　立　：1945年8月17日（宣言）
通　貨　：ルピア
為替レート：1000ルピア＝12.51円（2008年8月当時）



外務省HP(各国・地域情勢)より

(2)インドネシア選定理由

兵庫県に住むインドネシア国籍住民は、822人（2007年12月末現在）である。県内の登録在住外国人としては9番目に多く、10年前（1997年）の493人と比べても年々増加しているのに伴い、学校におけるインドネシア国籍の児童生徒の在席数も増加傾向にある。

一方、インドネシア国内で日本語を学習する生徒・学生の急増や日・インドネシア経済連携協定（EPA）に基づくインドネシア人看護師・介護福祉士候補者の日本への受入れなど、人を通じた交流も盛んになってきている。インドネシアとのつながりや現状を理解・把握することは、兵庫県内の教育現場において重要であると考えられる。

(3)海外研修日程表

2008 年 月 日	曜	日 程	宿泊地
7 月 30 日	水	伊丹 ⇒ （成田経由） ⇒ ジャカルタ	ジャカルタ
7 月 31 日	木	①JICA インドネシア事務所訪問（オリエンテーション･安全対策ブリーフィング）	
		②インドネシア大学日本研究センター(JICA 技術協力プロジェクト視察)	
8 月 1 日	金	③生物学研究センター(JICA 技術協力プロジェクト視察)	
		④ストリートチルドレン更正施設（現地 NGO（Setia Kawan Raharja Foundation）プロジェクト視察）	
		⑤JICA 専門家及び職員との意見交換会	
8 月 2 日	土	ジャカルタ ⇒ ジョグジャカルタ	ジョグジャカルタ
		⑥インドネシア語教室（インドネシア文化体験）	
		⑦ホームステイ（生活状況実態調査）	
8 月 3 日	日	⑧ガムラン音楽またはバティック製作教室（インドネシア文化体験）	
		⑨ジョグジャカルタ市内の市場及び書店視察（生活状況実態調査及び教材収集）	
8 月 4 日	月	⑩学校視察及び日本文化紹介（京都大学東南アジア研究所のプロジェクト視察）	
		⑪ホームビジット及び昼食交流（生活状況実態調査）	
		⑫サイエンスカフェ（京都大学東南アジア研究所のプロジェクト視察）	
		⑬JICAボランティアとの意見交換会	
8 月 5 日	火	⑭ワテス国立第一中学校（青年海外協力隊員･理数科教師活動現場視察）	
		⑮ジョグジャカルタ特別州スポーツ青年局（青年海外協力隊員･バレーボール隊員活動現場視察）	
8 月 6 日	水	⑯ボロブドゥール遺跡（有償資金協力プロジェクト） プランバナン遺跡（草の根文化無償資金協力及び有償資金協力プロジェクト視察）	ジャカルタ
		ジョグジャカルタ ⇒ ジャカルタ	
8 月 7 日	木	⑰JICA インドネシア事務所訪問（海外研修帰国報告会）	機中泊
		⑱スラム地域の学校及び寮の視察（現地 NGO（HIMMATA）のプロジェクト視察）	
		ジャカルタ ⇒ （成田経由） ⇒ 伊丹 （8 月 8 日着）	

1-5 海外研修訪問先

1）JICA インドネシア事務所訪問（オリエンテーション・安全対策ブリーフィング）

目的：①インドネシアの基礎的な情報、教育事情及びJICA の援助方針についてのオリエンテーションの実施
②安全対策ブリーフィングの実施

所感：①インドネシアにおけるJICAの事業概要について説明を受け、JICAが実施する援助もハード中心のものからソフト（技術移転や能力向上）中心のものに変わってきており、相手国のニーズに基づいて、援助を実施していることが理解できた。
②日本とは異なる環境であることから、緊張感を持って研修に臨まなければならないと感じた。

2）インドネシア大学日本研究センター（JICA 技術協力プロジェクト現場視察）

目的：①日本が実施する政府開発援助（ODA）がどのように実施されていて、現地の人にどのように思われているのかを知る。
②日本語を学ぶ学生と意見交換を行い、インドネシアから見た日本について考える。

所感：①プロジェクトの実施においてインドネシアの文化や人の価値観などが密接に絡んでいることを感じた。
②客観的に日本を見る機会になり、自分自身の考え・生き方や日本の教育の現状について改めて見直すことができた。

3）生物学研究センター（JICA 技術協力プロジェクト現場視察）

目的：①日本が実施する政府開発援助（ODA）がどのように実施されていて、現地の人にどのように思われているのかを知る。
②インドネシアの生物多様性を理解し、今日、学校現場で重要性を増している環境教育の一助とする。

所感：①このような分野において、日本が援助を実施し、さらには、日本の大学と共同研究をしていることに驚いた。
②熱帯雨林の保護と持続可能な開発は、地球温暖化防止の観点からも非常に重要である。今後、企業が、利益を生み出すために熱帯雨林を利用するようになった時、熱帯雨林や生息する動植物の行方はどのようになるのか考えさせられた。

4）ストリートチルドレン更生施設（現地NGO（Setia Kawan Paharja Foundation）プロジェクト視察）

目的：①現地NGOとJICAが共同して実施する草の根技術協力プロジェクトの活動現場を視察し、政府が実施するプロジェクトとの違いを理解する。
②現地の人々と交流を図りながら、ストリートチルドレンが更正するための活動実態を理解する。
所感：①草の根レベルで実施されるプロジェクトは、最終裨益者が目の前にいるので、理解しやすい。
②ストリートチルドレンを生み出してしまう社会的状況、家族のあり方、貧困層の生活や人生観などが、講話の中から理解できた。毎日の生活を不満に感じることなく、自分自身を高め、前向きに生きていこうとしている力強い姿が見られた。

5）ＪＩＣＡボランティア（青年海外協力隊員・シニア海外ボランティア）との意見交換会

目的：①JICAボランティアとして国際協力に従事する人々と意見交換を行い、JICAボランティアが活動や生活を通じて感じたインドネシアという国（社会や文化）や人々の様子について聞き、日本との相違点を理解する一助とする。
所感：①JICA ボランティアは、国際協力の難しさも感じつつも、自分なりの協力スタイルを模索して焦らず着実に取り組んでいる姿に感銘を受けた。そして、国際協力を行うということは、相手からの見返りを求めて活動するものではない。それは、教育者である自分にとっても大切な心構えであり、自分自身を見直すいい機会になった。

6)インドネシア語教室及びインドネシア文化体験教室（ガムラン音楽またはバティック製作体験）

目的：①ホームステイに備え、簡単なインドネシア語を学ぶ。
　　　②文化体験教室（ガムラン音楽またはバティック製作体験）に参加し、インドネシア伝統文化への理解を深める。

所感：①インドネシア語を教わることで、教えられる者の立場に立つことができ、自分の教え方を見直すことができた。
　　　②伝統文化や伝統工芸は、その場所の風土から生み出されるものだと実感した。

7）ホームステイ（生活状況実態調査）

目的：①インドネシアの家庭でのホームステイを通して、インドネシアの文化や習慣などを理解するとともに、現地の人との交流をはかる。

所感：①「インドネシアは安全ではないからインドネシアを好きになれない人がたくさんいる。インドネシアを平和な国にして、世界中の人にインドネシアに来てほしい。」というホストファミリーの言葉に心を打たれた。

8）ジョグジャカルタ市内の市場見学及び書店視察（生活状況実態調査）

目的：①帰国後の授業実践で活用する物品や教材収集のため、市場や書店を視察する。

所感：①市場の人の多さに驚いた。店も人もひしめき合っていて、周囲の状況を観察するのにも一苦労だった。人々の元気よさが印象的だった。市場では、色々な物が売られており、値段も日本に比べて安かった。書店では、日本の漫画本（インドネシア語版）が山積みになっており、日本の漫画文化の進出ぶりに目を見張った。

9）日本文化紹介・ホームビジット・サイエンスカフェ（京都大学東南アジア研究所のプロジェクト現場視察）

目的：①ジャワ島中部地震で被災した子供たちのトラウマケアや防災拠点作りを行っている京都大学が実施するプロジェクト現場を視察し、現地の人々と交流を図る。日本の大学と現地の人々が協力し合いながら一つの目標を達成しようと実施する草の根の活動実態を理解する。

所感：①子供たちは、笑顔とパワーに満ち溢れており、一生懸命勉強している様子が見られた。我々の拙いインドネシア語にも耳を傾けてくれ、一生懸命返答してくれる様子に感動した。

10）ワテス国立第１中学校、スポーツ青年局（青年海外協力隊活動現場視察）

目的：①青年海外協力隊の活動現場を視察し、授業参観や現地教員との意見交換を行い、インドネシアの教育システムを理解する。また、現地の人たちの日本に対するイメージや興味を知り、相互理解を図る。

所感：①インドネシアの教師が解決しなければならない問題は、日本の教師が解決しなければならないものと同質のものであった。私はこれまでスポーツを通じての国際協力にどのような意味があるのだろうかと、少々批判的に見ていたが、子供たちに生きる目標を与え、人と人とのつながりを拡げる素晴らしい活動であるとことがわかった。

11）ボロブドゥール遺跡（有償資金協力プロジェクト視察）
プランバナン遺跡（草の根文化無償資金協力及び有償資金協力プロジェクト視察）

目的：①ODA（有償資金協力及び無償資金協力プロジェクト）現場であるボロブドゥール遺跡及びプランバナン遺跡の見学を通して、資金協力の実態及びインドネシアの文化について考える一助とする。

所感：①世界遺産である２つの宗教建築物（仏教とヒンドゥー教）を見て、それぞれの違いを感じることができた。３つの宗教を中心に対立せず共存しているところにインドネシアの素晴らしさを感じた。

12）JICA インドネシア事務所訪問（海外研修帰国報告会）

目的：①9 日間の海外研修を振り返り、期間中の学びを JICA 事務所員と共有し、今後の授業実践についての抱負を語る。

所感：①日本と異なった環境で一度に多くのことを見聞して混乱していたが、9 日間の研修を通して得た気付きや学びを振り返り、整理することができた。今回の研修の成果を学校現場で活かしてほしいとの言葉を JICA 所員からかけてもらい、帰国後の実践に向けてさらなる意欲が湧いた。

13）現地学校・寮（現地 NGO（HIMMATA）のプロジェクト現場視察）

目的：①参加教員から強く要望のあった、スラム街で活動している現地 NGO の活動現場を訪問し、人々との交流をはかる。

所感：①スラムの様子や学校を訪問し、「学びたい」という気持ちはどこの国も共通しているものだと思った。どんな状況であれ、教育は必要なものだと思う。

1-6 参加者リスト（敬称略、小学校・中学校・高等学校の種別内で五十音順）

	氏名	勤務先　（学校名）	担当教科
1	清　献一郎	西宮市立神原小学校	
2	野添　洋子	川西市立陽明小学校	音楽専科
3	三好　裕子	神戸市立東灘小学校	
4	貞松　千佳子	兵庫県立芦屋国際中等教育学校	英語
5	竹岡　聡子	尼崎市立成良中学校	保健体育
6	田尻　伸子	芦屋市立山手中学校	英語
7	山中　信幸	柳学園中学・高等学校	中学　社会（公民） 高校　地歴（日本史）

同行者

	氏名	所属先　・　役職名
1	藤善　奈美	JICA 兵庫 国際協力推進員（兵庫県[神戸市を除く]担当）
2	吉井　さやか	社団法人青年海外協力協会(JOCA)近畿支部 職員

※「教師海外研修」（全体総括、データ整備、事前研修、海外プログラム準備、海外研修（同行ファシリテーター、研修管理調整）、成果品作成、帰国報告）を実施するにあたり、その運営を円滑かつ効率的に進めることを目的として、当該業務の実施を社団法人青年海外協力協会（JOCA）近畿支部に委託した。

1-7 主要面会者リスト

	氏名	所属先名	役職名など
1	坂本 隆	JICA インドネシア事務所	所長
2	水野 隆		次長
3	舘山 丈太郎		所員
4	福田 千秋		所員
5	Erina Nakamura Saragih		所員
6	小座野 八光	インドネシア大学日本研究センター	JICA 専門家
7	バクティアル・アラム		所長
8	Lea Santiar		副所長
9	鍛冶 哲郎	生物学研究センター	JICA 専門家
10	小林 浩		JICA 専門家
11	Achmad Dinoto		プロジェクトマネージャー
12	鈴木 亮	ワテス国立第 1 中学校	青年海外協力隊員(理数科教師)
13	吉嶋 哲也	ジョグジャカルタ青年スポーツ省	青年海外協力隊員(バレーボール)
14	幸池 勇平	ジョグジャカルタ国立大学	青年海外協力隊員(料理)
15	滝沢 直美	ジョグジャカルタ第 4 国立実業高校	青年海外協力隊員(料理)
16	金子 裕介	スレマン第 3 中学校	青年海外協力隊員(理数科教師)
17	吉原 峰代	ジョグジャカルタ国立大学	シニア海外ボランティア（手工芸）
18	濱元 聡子	京都大学東南アジア研究所（ジョグジャカルタ特別州バントゥル県ゲシアン村）	研究員
19	Dindin	Setia Kawan Paharja Foundation	代表
20	Swanny	ジョグジャカルタ語学学校 ALAM BAHASA	